空間あい サロンコンサートIX ～あなたに愛と調和と芸術を～

ARTS for the future! ▶2
コロナ禍を乗り越えて

京都芸大音楽学部 70周年記念

クリスティーナ・ヴァツロヴァ
&大嶋義実
デュオ・リサイタル

ハプスブルク残照

～モラヴィアの草原を渡る風のように～

ピアノ 水野雅子
Masako Mizuno, Piano

KRISTINA VACULOVA × YOSHIMI OSHIMA

DUO RECITAL

2022年7月2日(土)16:00開演(15: 15開場)

高崎芸術劇場　音楽ホール
TAKASAKI CITY THEATRE CONCERT HALL

主催:株式会社 空間あい　後援:群馬交響楽団、上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA、ラジオ高崎

PROGRAM

F.＆K.ドップラー／プラハの想い出
F.&K.Doppler / Souvenir de Prague, Op. 24

W.A.モーツァルト／二本のフルートのための『ドン・ジョヴァンニ』『魔笛』より
W.A. Mozart ／ “ Don Giovanni ” “ Die Zauberflöte ” für zwei Flöten

P.ヴラニツキー／二本のフルートのための６つのデュエット より
P. Wranitzky ／ Sechs Duette für zwei Flöten

F.ドップラー／ハンガリー小二重奏
F. Doppler ／ Duettino Hongrois, Op.36 pour deux flutes et piano

――― 休 憩（20分）―――

B.マルチヌー／二本のフルートのためのディベルティメント
Ⅰモデラート　Ⅱ アンダンテ　Ⅲ アレグレット
B. Martinů ／ Divertimento pro dvě zobcové flétny
I Moderato　II Andante　III Allegretto

F.ドップラー／夢遊病の女
F. Doppler ／ LA SONNAMBULA　Paraphrase en souvenir de Adelina patti, pour deux flutes et piano Op.42

PERFORMERS

クリスティーナ・ヴァツロヴァ博士(フルート) *Dr.Kristina Vaculova／Flute*

ブルノ・ヤナーチェク音楽アカデミーにおいてヴァーツラフ・クント教授に師事。
同校修士課程修了後博士課程に在籍。2015年論文「20世紀におけるフルート奏法の発展と現代トレンドへの適用」において博士号取得。ブダペスト、フランツ・リスト音楽院にても研鑽を積む。2021年までブルノ・フィルハーモニー管弦楽団フルート奏者を務め、現在ヤナーチェク音楽アカデミー助教授（Assistant Professor）として後進の指導にもあたっている。フルート奏法のさらなる発展研究のため本年京都市立芸術大学客員研究員を務める。2001年コンチェルティーノ・プラガ第1位、2009年フリードリヒ・クーラウコンクールソロ部門2位、2011年同コンクールトリオ部門1位等、受賞歴も数多い。

大嶋 義実(フルート) *Yoshimi OSHIMA ／Flute*

京都市立芸術大学卒業後、ウィーン国立音大を最優秀で卒業。プラハ放送交響楽団首席フルート奏者、群馬交響楽団第一フルート奏者を歴任。現在京都市立芸術大学副学長・理事、同大音楽学部・大学院研究科教授を兼任している。日本音楽コンクール他、内外のコンクールに入賞入選。ソリストとして国内はもとよりヨーロッパ各地、アジア諸都市で毎年公演を行なうほか、プラハ響、群響、京響をはじめ数多くのオーケストラと協演。13枚のＣＤをリリース。2008年発売の《モーツァルト・フルート四重奏、協奏曲集》は「モーツァルト信奉者たちを統合するための全てを備えている」と仏ディアパソン誌上で評される等、日本、海外の主要音楽誌において高い評価を得た。著書「音楽力が高まる17の『なに？』」も好評を博している。本年講談社より「演奏家が語る音楽の哲学」を上梓。

水野 雅子彦（ピアノ） *Masako MIZUNO／Piano*

京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。NHK洋楽新人オーディションに合格　NHK=FM午後のリサイタルに出演。大阪フィル、関西フィル、ブルガリア国立室内オーケストラ、コチアン弦楽四重奏団、ステファン・キーロフ弦楽四重奏団、ほかと共演。第33回文化放送音楽賞、第24回京都芸術祭京都市長賞、第32回京都芸術祭京都新聞賞を受賞。公益社団法人日本演奏連盟、ムジカＡ国際音楽協会、京都音楽家クラブ会員、びわ湖国際フルートコンクール公式伴奏者。現在、京都文教短期大学非常勤講師。

プラハのひとたちは怒っている!!

大嶋義実

プラハのひとたちは怒っている。「何に？」って、ウィーンやザルツブルクのひとびとが今更モーツァルトのことをちやほやしていることに、だ。あまつさえその名を使って大いに金儲けまでしている。いや、ウィーンやザルツブルクだけではない。ほんのちょっとでもモーツァルトが立ち寄った村や町は、そのことを大仰に言い立てては彼の記念碑を作り、モーツァルト饅頭（ウソ、本当は記念グッズやお菓子）を作って商売を始める。

いったい誰が生前のモーツァルトを手厚くもてなし、彼の音楽に理解を示したというのか。ミラノでは物乞い扱いされ、パリでは「音楽の才能は半分でいいから、世渡りを学べ」と手厳しく追い返される。生まれ故郷ザルツブルクでも不遇をかこち、ウィーンに出てからは職を失う。そのウィーンでは一時期フリーの音楽家として注目を集めるも、現代のアイドルもかくや、と思わせる凋落ぶりだ。満を持して発表したオペラ「フィガロの結婚」も期待したほどの成功には遠く及ばず、早々と演目をかけ替えられてしまう始末だ。

ところがそのモーツァルトをして「連中は僕のことをわかっている」と言わしめた街がある。それがプラハだ。ウィーンでは不発に終わった「フィガロ」はここでは大人気。「プラハではどこに行ってもフィガロ、フィガロだ」と彼自身が報告を残している。モーツァルトの生涯で数少ない栄光の舞台を準備したのがプラハだった。彼はそんな街のためにオペラを書いた。「ドン・ジョヴァンニ」がそれだ。

この街には今も色濃くモーツァルトの呼吸した空気が息づいている。なんせ彼自身の指揮した劇場がまだ現役で稼働しているのだから。そしてウィーンでは共同墓地に放り込まれてしまった天才を悼み、世界で最初の追悼ミサをあげたのがプラハの友人だったことも忘れるわけにはいかない。

演奏会をフランツ＆カール・ドップラーの「プラハの想い出」で始めよう。ドップラー兄弟は19世紀、ハプスブルグ（オーストリア・ハンガリー）帝国を代表するフルート奏者であり作曲家。広大な帝国領内を演奏して回り、各地で兄弟デュオとして人気を博した。この作品からは音楽を愛してやまないプラハの人々の陽気な歌声が聞こえてくる。きっと彼らもこの街に愛された天才に思いをはせたに違いない。

続いてフルート二本のリダクション版で、件の「ドン・ジョヴァンニ」からアリアを何曲か。次にモーツァルト晩年の大作「魔笛」のアリアを数曲、とプログラムを進めたい。レコード（CD）もラジオも配信もなかった時代、ひとびとはこうして家庭でオペラを楽しんだ。

ところで「魔笛」第二章を作ろうとした人物がいる。文豪ゲーテだ。そのゲーテから続編作曲の依頼を受けた人物こそがチェコはモラヴィア出身の作曲家ヴラニツキ―だった（本日の出演者クリスティーナさんも同地域の出身）。彼は当時ウィーンで、モーツァルトは言わずもがな、ハイドンをもしのぐ人気を博していた。モーツァルト同様フルートを愛していたらしい（モーツァルトがフルート嫌いだったなんて話を信じてはいけない。それが本当ならフルートが主役になるオペラ「魔笛」を書くわけがない）。彼の「6つのフルートデュエット、作品Ⅱ、第１番ト長調」は、モーツァルトの「フルート協奏曲第２番」に酷似したパッセージが耳に残る。どちらかが真似したことは間違いない。

前半最後は「ハンガリー小二重奏曲」で、帝国の一員ハンガリーの響きに耳を傾けていただこう。作曲者ドップラーはそもそもハンガリー人だ。彼らにとってはお手のもののマジャル（ハンガリーの正式呼称）民族独自の熱いリズムや旋律が聞こえてくるはずだ。

後半は帝国解体をその身で経験したチェコの作曲家マルチヌーのディヴェルティメントから始めよう。1918年彼が28歳の時、チェコはようやくハプスブルク家の支配から独立を果たした。にもかかわらず、その国土はほどなくナチスに蹂躙される。当時パリに滞在していたこの作曲家は反ナチの立場から作品を発表。秘密警察に追われることになる。着の身着のまま無一文でアメリカに亡命し終戦を迎えた彼は、戦後、幾度か帰郷を試みるも、祖国に樹立された共産政権を嫌い、最後まで望郷の念に駆られながらヨーロッパ各地を放浪した。二本の笛のために書かれた晩年の作品は、そんな漂泊の人生を象徴するかのように、諦念とノスタルジーが混じりあった不思議な響きがする。「作曲家は幸せだ。音楽により精神的帰郷ができるから」とは彼の残した言葉だ。その故郷ポリチカという小さな街はモラヴィア地方とボヘミア地方の境界にある。幼い頃、ボヘミアの森と戯れモラヴィアの草原に遊んだ彼ならではの音を味わいたい。

プログラム最後は、かつてハプスブルグ家が治めていたスペイン生まれの歌手アデリーナ・パッティの想い出に捧げられたドップラーの「夢遊病の女によるパラフレーズ」で締めくくろう。テーマとなったベッリーニのオペラは、世界をまたにかけ活躍したこのソプラノ歌手の当たり役でもあった。超絶技巧を盛り込んだフルート二本による華やかな作品は、稀代の名歌手をほうふつとさせるに十分な効果を生んでいる。

かつてハプスブルク帝国を彩ったフルートの音色を、モラヴィアの草原に吹く風をまとってやってきたクリスティーナさんとともに奏でられることは望外の喜びだ。

大嶋 義実
「演奏家が語る音楽の哲学」
(講談社選書メチエ)

在るものに無いもの、無いものに在るもの、それは音楽。
クラシックの作曲家が残した楽譜は音楽そのものではない。
音符を音として立ち上げ、音楽にそのものとして表すのは演奏家である。では、演奏家とは何者なのか。演奏家＝音楽家とは、譜面を掘り起こすことでそれまでの「不在」であった音楽への扉を開き、広く交歓を可能にする想像力を持つものである。音楽からの呼びかけに応え、楽譜の向こう側にある音楽を蘇らせること。音と芸術と人間のかかわりについて第一級の演奏が語る。

5月12日講談社より出版!
本日ロビーにて、サイン入りで販売！ぜひご一読ください。

演奏家が語る音楽の哲学

大嶋　義実著

実体験もとに「深奥」を語る

著者とは同時期にヨーロッパに留学していた世代。プラハの一流オーケストラから持ち帰ったその美しい音は群馬交響楽団の宝物と言われ、退団した時の惜しまれ方も記憶に鮮明に残っている。読んでいて驚いたのはその膨大な読書量から来る古代史、楽器博物誌から哲学に至る教養の広さ、深さ。これは僕とは大違い。各章は一見さりげない日常の体験や、幅広い世界観から選ばれた愛読書の引用から始まり、どんどん核心に迫っていくという書き方。その導入からして、全てが「小さな音楽辞典」とも言える内容を含んでいて勉強になる。特に、活動していたチェコの音楽史解説などは貴重だ。

「音楽に表れるのは個性か普遍性か」のような、音楽家なら誰しも日常様々に思考を巡らしはするがまとまった考えにはなかなか至らないような大きなテーマにぶつかって解き明かしてゆく態度は極めて潔く、読んでいてスカッとする。

「知るかぎり、第一線で活躍する音楽家たちのなかで、個性を売り物にしている人物など一人もいない」「彼らの演奏は、音符の向こう側から語りかけられる音楽自身の発する声に、謙虚に耳を傾けた結果奏でられたものだ」記された音符の一つ一つが『どのように演奏されたがっているか』を読み取ることが、なによりも優先されるべき課題であることを彼らは自覚しているからだ」と、断じて見せられると、思わず膝を打って「そうなんだよ！」と叫んでしまいそうになる。著者の哲学はそこに収まらず、なんと「バッハやモーツアルトの作品の一つ一つは彼ら自身の創作物ではない。その音楽自身が彼らの名を呼び、彼らをして楽譜にしたためさせたものだ」という（僕自身は全てに同意できるわけはなかったけれども）大胆な音楽観にまで繋がっていく。

国際コンクールの審査員として、また武満作品など現代音楽演奏の現場から得た啓示、先生であるシュルツ氏との実際の共演エピソードに基づく「師弟」観、オーケストラでの長い体験に基づく「ずれこそが音の豊かさの秘密」に至る観察などは、実体験からの説得力、スリルと魅力に溢れていて引き込まれる。音楽に詳しくない読者にも理解できるように音楽の深奥を語るのはとても難しいことだが、この本はその稀有な成功例になっていると言えるだろう。

《評》指揮者　茂木　大輔

（講談社・1760円）

おおしま・よしみ　58年生まれ、フルート奏者。プラハ放送交響楽団、群馬交響楽団を経て、母校の京都市立芸術大学で教授・副学長。

2022年6月18日　日本経済新聞 朝刊30面

折々のことば　鷲田 清一　2383

貧しさと戦争を生きた少女は、音楽に触れ、今自分のいるここだけが世界のすべてではないことを悟った。

大嶋義実

フルート奏者の母親は小学生の頃、音楽の時間に蓄音機で聞かせてもらったピアノ曲に揺さぶられ、銀行に就職してからも、裏手の屋敷からピアノ演奏が聞こえると便所にこもり耳を傾けた。それが何かは不明だけれど凄（すご）い世界に橋が架かった。世界を劈（ひら）くそうした窓を学問に見つけた子もいただろう。『演奏家が語る音楽の哲学』から。

2022・5・19

2022年5月19日　朝日新聞　朝刊1面

Můj splněný sen

武者小路千家　官休庵にて

Poprvé jsem se setkala s Yoshimim, když mi bylo asi 13 let. Hrála jsem tehdy na flétnu jednu z Händelových Sonát. Moje učitelka flétny mi půjčila nahrávku- kazetu Händelových Sonát v interpretaci Yoshimiho Oshimi a Jaroslava Tůmy se slovy, abych si za domácí úkol podle pana Oshimiho udělala melodické ozdoby. Poslouchala jsem kazetu stále dokola a snažila se co možná nejlépe splnit svůj úkol. Hudba, kterou jsem slyšela, mne zcela uchvátila.
Asi o deset let později jsem se, tentokrát už osobně, setkala s panem Oshimou v Praze. Přijel tehdy do ČR koncertovat a vyučovat na masterclass. Naše setkání mi hluboce utkvělo v paměti.
Přibližně před dvěma lety jsem silně zatoužila změnit prostředí, ve kterém jsem žila. Přemýšlela jsem, kam vycestovat. S orchestry jsem navštívila mnoho zemí, mezi ně patřilo i Japonsko, kam jsem se podívala několikrát. Vaše zvyky, způsob života a kultura mne uchvátily už tehdy. Napsala jsem panu Oshimimu dopis s žádostí, zda by bylo možné přijet na kyotskou univerzitu jako hostující pedagog. Dalšího dne jsem obdržela kladnou odpověď. Následovalo vyřizování potřebných dokumentů k vycestování a k pobytu v Japonsku. Mezitím se situace s Covid-19 ve světě dramaticky zhoršila. Vysněnou cestu do Japonska jsem tak musela o více než rok odložit.
Jsem velmi vděčná, že mohu pobýt ve vaší zemi. Toto „japonské“ období považuji za nejšťastnější ve svém životě. Velmi obdivuji vaši pracovitost, kultivovanost, zdvořilost, ohleduplnost a cit pro krásno.
Srdečně děkuji Yoshimimu za vše, co pro mě udělal, za vše, co pro mě denně dělá, za jeho laskavost, velkorysost a za jeho přátelství.
Jsem šťastná, že dnes mohu vystoupit s tak báječným flétnistou, hudebníkem a mimořádným člověkem, Yoshimi Oshimou. Splnil se mi tím můj sen.

クリスティーナ・ヴァツロヴァ

あなたに愛と調和と芸術を
株式会社 空間あい
株式会社 空間あい　代表取締役　新井　淨
〒370-0087 高崎市楽間町280番地14　Phone 090-1815-4608　Fax 027-344-1582
【E-mail】info@kuukanai.com　【HP】https://kuukanai.com　【ONLINE SHOP】https://shop.kuukanai.com